教育風土体験研修で学んだこと

◦研修者　名草小学校教諭　若井　祐平
市教委指導主事　関根　英男
〃　　石川　博右

◦　期　日　６０.１１.２５～１１.２６（１泊２日）

◦　場　所　八千代市立八千代台東小学校・横浜市立三ツ沢小学校

1.　八千代台東小学校から学ぶ

急激な児童数の増加と八千代台東団地建設に伴い，昭和４０年４月に八千代台小学校から分離開校した八千代台東小は，八千代市駅から徒歩で約１０分。市街地のそばでありながら，緑深い自然環境……　住宅街の中にたたずんでいる。

現在，児童数７０５名，教職員数３１名という人員構成をもって，１８年間にわたって体育指導を中核として研究実践にとりくんできた学校である。校庭には，足利市内の小学校ではみられない数多くの大がかりな遊具施設が整然と配置され，校舎の周りには雑草が一本もなく，ごみすらみあたらない。手入れの行きとどいた樹木が一層落ち着いた雰囲気を作り出している。そのような環境の中でどのような教育が行われているのか，わずか数時間という短い研修の中で私たちなりにとらえたことをのべてみたい。

(1)　子供の姿

①　余暇利用

たまたま，訪問予定時刻より３０分程早目についたおかげで，校庭での昼食前の余暇利用の様子を見る機会を得た。昇降口からかけ足で広い校庭にとび出し，思い思いの遊びを始める子供たち。自分の体より大きなボールをころがしながら，トンネル山まではこび上げる低学年の男の子。その周りで一緒になって山をのぼりおりする子供達もいる。くものす山やくじら橋の上をわたり歩く高学年の子供。また一方では，鉄棒で足かけふり上がりに夢中になっている女の子達もいる。右手，左手と交互にドッジボールを投げ合う男の子達。ドッジボールにせいを出す子供達。全員１１月末でありながら短パンに半袖・ランニングという運動着姿で広い校庭をふるに活用して遊んでいる。いや，遊んでいるというよりも，私たちの目には運動そのものであると感じた。かがんだり，歩いている姿はなく，活動量に満ちた元気いっぱいの姿であった。

１０分くらいの時間が過ぎた。放送の合図で一斉に昇降口へ向かってかけ出す。校庭は，いつのまにか静かになった。先程の子供達の姿がものの数秒で消えてしまった。異様な感じがする程である。

②　清掃での様子

校長先生の案内で，校舎内の清掃時における活動の様子を見せていただいた。どの子も

運動着で頭に三角巾という姿である。たてわりではなく，クラスごとに分担された箇所を黙々とやっている。昇降口でくつの検査をしながら一つひとつの下駄箱をそうじしている高学年の子達。腰をかがめてぞうきんを二つに折り，力いっぱい廊下をみがいている低学年の子供。階段の手すりや窓のさんをていねいにふいている子。長ぐつをはき，ホースで水をかけながらブラッシでみがくトイレそうじの子供達。窓の外では，樹木の枯れ葉や木ぎれを男女二人で協力してちりとりに入れる子ども。一人ひとりの役割分担が明確にされ，校舎や敷地のすみずみまできれいにしようという気持ちが，見ている私達にも伝わってくる。むだ話一つなく，実に節度ある清掃ぶりだった。

③　授業での様子

第5校時，2年・4年・5年・6年の体育の授業を参観させていただいた。私達のために特別に準備した授業ではなく，日頃の体育授業をその日ちょうど体育の時間にあたったクラスで見てもらうという心にくい校長先生の言葉であった。

校長先生の案内で校庭に出る。体操棒・輪をつかった体操をやっている6年生。グループ活動を主体とし，タイミングよくやっている。自由な雰囲気の中で，めいめい自分の選んだ技に黙々と励む5年生の鉄棒の授業。校庭での参観は，周りの遊具等に気をひかれ，子供の活動ぶりをよく見ないままに終わってしまい残念であった。

体育館では，2年生と4年生が授業をしていた。2年生は，障害物を置いての折り返しリレーをやっている。体育館いっぱいにひびきわたる声援。ころんでも最後まで走りぬく男の子の姿が印象的であった。4年生は，そのとなりで台上前転をしている。2年生のにぎやかな声に少しも気をひかれず，どの子も自分のめあてに取り組んでいる。技能の高い子は，台上で腕立て前方転回をしている。互いに技を見合い，回り終わると次の子にアドバイスをする。そして列にもどる際，うさぎとびで帰る。無駄のない活動量のある授業だと感じた。話し合いは大きな声ではっきりという。実に生き生きとしている姿であった。

(2)　教師の姿

短い時間の訪問であったために教師の姿は，あまりとらえることができなかったが，教頭先生以下全員体育着という姿が印象的であった。子供と共に自由に活動できるようにしている。

①　余暇利用・清掃時での教師

昼食前の余暇時間であったためか，校庭には2，3人の教師の姿しかみられなかった。卒業記念アルバムにのせるためであろうか，6年生らしい子供達をくものす山に登らせ，写真撮影している教師。ボール遊びに夢中になっている中学年の子供達の中に入って共遊している教師も見える。

清掃は，教師も共に働く。各教室で自分の机の整頓や書棚の整理をしている教師。校舎裏で樹木の手入れをしている教師の姿が見られた。

②　授業での教師

訪問者である私達に目もくれず，子供達と一緒になって動きづくりや練習に励む5，6

年の教師。これは，体育館における２年，４年の担任教師についても同じことであった。技能の高いグループのとなりに，まだ台上で十分回れない子供達のグループを置くという細かい配慮をしながら補助をしている４年の教師。養護学校から転入した子供をだきかかえながら，折り返しリレーをやっている子供達に目を配る２年生の若い男の教師。表情もやわらかく，実に生き生きとした姿であった。

(3) 施設・環境

１８年間にわたって，体育指導を中核とした研究実践を続けている八千代台東小は，なんといっても体育環境がすばらしい。校庭には，某大学教授が子供の立場を考えて設計した大規模な遊具が整然と配置され，鉄棒が４か所，平行棒，タイヤ群，ジャングルジム，メリーウェーブ，丸太で作った平均台，砂場，あり地ごく，トンネル山，太鼓橋うんてい，二人乗りブランコ，ジャンプ標……。校舎前面の山林にはアスレチック施設，マンモスすべり台。体育館においても同様に，室内すべり台，トランポリン，つな，そして壁面にかかげられた各種の運動の写真。昇降口には，ボール，体操棒といつでも自由につかえるよう準備されている。また，いい忘れたが，校庭の芝のそばにはマットがしかれ，砂場にはとび箱が置かれている。これは，６年生の当番が毎日出し入れしているのだそうだ。

「環境は人をつくる。」という考えにたち，常に子供の側からみて整備充実されているのである。

体育施設だけでなく，教材園，竹やぶ，花壇，気象観測所といった面もおこたりなくととのえられている。校舎内では，なんといっても目を見はったものが図工作品のすばらしさである。どの教室の廊下にも，それぞれ大きな画用紙からはみ出さんばかりにのびのびとした力強い絵が描かれている。体育を中核としながらも他教科にまで生き生きとした子供達の活動ぶりがうかがえた。

(4) 教師の研修

校長先生から学校概要の説明をうかがっているときにこんな話が出された。

「私（校長）は，今年この学校に赴任してきたが，赴任早々四月二日の春休みのとき，全職員が体育館に集まり実技研修をやっている。本校新任者に対して，一刻も早く軌道にのってもらうために行なわれているんですね。」

この言葉から，子供と同様に実践を通して体得しようとする教師の使命感，また年齢差にかかわりなく本校在任者が新任者を指導するという厳しさの中にも同僚愛を感じさせられた。八千代台東小の教育と深くかかわりのある教師の研修について，紀要「東小の体育－昭和58年度」からさぐってみた。

① 共同研究

学校教育目標具現のため，体育指導の研究を全職員で行うこの研究は，本校の研究の土台である。授業研究が中心となる。子供研究，教材の研究につとめ，また一方では，日頃の授業実践や公開授業，実技研修，他校参観，実践と論理の研究といった面から授業研究会をもつわけである。ちなみに，授業研究会は一学期に５回ひらかれ，どのクラスも学期

1回研究授業を実施している。また，実技研修は，年間１６回行なわれ，それぞれ1時間から2時間かけて行なわれる。特に4月に集中しているのは，新任者をむかえ，全職員の共通理解をいちはやく図るためであろう。特に研修においては，転出された教師を講師としてむかえ入れるところに特徴がある。１８年間も体育指導を中核として続いてきた原動力の一端にこのことからふれることができた。教師の伝統を大切にしようとする姿勢がうかがえる。

② 層別研修

教師としての資質を向上させるために経験年数によって人員を構成し，幹部・中堅・初任若年と層にわけられている。研修教科を各部会で選び，年間にわたって研修する。指導法の工夫や学習の充実を重点としている。

③ 学年別研修

学年主任を中心に，同学年の教師で構成されたこの研修は，私達のいう学年会にあたるものであろうか。学年経営，学級経営について話し合い，教科指導や進度状況の調整はもちろん，日常の問題をよりよく解決していこうとするのである。ときには校長，教頭，教務主任が教室訪問をし，学年，学級経営のあり方について指導するともいう。

(5) 八千代台東小の教育

めぐまれた自然環境，物的環境の中で，生き生きと活発にしかも節度をわきまえた子供達。そして１８年間にわたって体育指導を中核として研究実践しながら，子供と共に歩んできた教師の姿。短時間の中で私に強い印象をあたえた八千代台東小の教育とは何なのだろうか。校長からの説明，体育主任からの説明をもう一度思いおこし，さぐってみたい。「野性味豊かな教養人の育成」を教育目標としてかかげ，たくましい心・体と共にするどい知性ややさしい心を豊かに身につけた子供をめざして２０年来取り組んできた八千代台東小。

教育目標具現の重点として，体育指導をとり上げた意図は，体育は一教科であるとともに人間形成という教育目標達成に直結する教科をのりこえた価値をもっているという考えから来ている。すなわち，体育は肉体的成長発達を企図するだけでなく，礼儀，人間関係の改善，自己統制，主体的・科学的に課題を解決する態度の形成される重要な教育活動ととらえたのである。こういったことを全教師が共通理解に立ち，市や地域の人々の願いをうけ，その願いを実現させるために全力をつくしているのである。地域の人達は，学校の取り組みに対し，ほこりをもっているという。うらやましいかぎりである。

八千代台東小は，教育方針として三つの柱をたてている。

一つは，集団生活におけるしつけと基本的行動様式をしっかりと身につけさせることである。学級，学年，学校集団の中で正しく適応できる社会性を身につけさせ，学習を効果的に進めていくために集団の一員としてのあり方を行動のくり返しを通して身につけさせようというのである。そのためには，教職員が率先して常に子供達の手本となるよう心がけているという。清掃時の子供の態度，放送の合図ですばやく行動にうつす子供の姿は，ここから来ているのである。

二つ目は，子供一人ひとりを見つめ，教材の価値を見直すとともに学習の過程を重視しつつ「学び方を学ばせる」指導である。

学習の主体は子供である。子供の立場から教材の価値を見直し，子供自ら創造する学習場面を大切にし，一人ひとりの子供の特性を引き出すよう心がけている。子供研究から始まり教材研究にいたり，そして授業研究で評価を求める本校の研究方法もここから発していると考えられる。「学び方を学ばせる」すなわち，主体的学びの指導により余暇利用の仕方がわかる子供が育つ。体育の日常化ということであろうか。昼食前の余暇時間の子供の様子から，十分育っていることがわかった。またこれは，生涯教育の理念にものっとったことである。体育指導を通し，「学び方を学ぶ」ことがやがて他教科にも生かすことができるであろう。

三つ目は，身体活動を通すことを大切にしながら，知識・態度・技能が身につくよう指導するということである。頭の中だけでなく身体的操作をとり入れ，子供の感覚を通して思考させ，身につけさせていく学習を大切にしているのである。

以上三つの柱をしっかりとおさえ，教師自ら次のような願いを大切にしているという。

◦教師の本領は児童の教育にある。教育力の上で自己の真価を問いたい。

◦教師の使命感を実践を通して体得したい。

◦切磋琢磨の上に真の同僚愛を具現したい。

◦職場の秩序を厳正に維持したい。

数多い授業研究会にいどむ教師。子供の立場を理解しようと実技研修を年度頭初から率先して取り組む教師。転出された先輩教師を講師としてむかえ，伝統を守ろうとするひたむきな教師。こういった自己に厳しい教師達が，教育方針をしっかりとおさえ，共通理解を十分図りながら，「野性味豊かな教養人の育成」をめざして，子供達と共に歩むのが八千代台東小の教育ではないかと思う。

2　横浜市立三ツ沢小学校に学ぶ

横浜駅から車で約１０分。交通量の多い国道１号線沿いにあるこの学校は，児童数約1300人という大規模校にありながら，学校の敷地がせまく，校庭も八千代台東小と比較すると４分の１程度であろうか。ここでは，校長室での副校長の説明，研究主任の説明をうかがうことができた。子供達や教師の姿等については，残念ながら目にすることはできなかったが，お忙しい中２時間も時間をさいて説明いただいたことに感謝しつつ，自分なりにつかんだことを述べてみたい。

(1)　研究の概要

昭和５７・５８年度と文部省より，算数科における関心態度の評価のあり方について研究するよう指定をうけた三ツ沢小は，まず目標分析からスタートした。目標分析と一口に言っても並々ならぬ努力や苦労があったことがうかがえる。算数科における４つの観点から評価目標を明確にし，３段階の評価基準（十分達成・おおむね達成・達成不十分）を設定する。この評価基準は，各指導内容について達成すべき目標に即して設定されるものであり，各内

容における達成状況を見ることができる。

したがって，教師にとって毎時間の授業における指導の重点が明確になり，「達成不十分」な子にはどのような点に配慮して指導すべきかなど，指導の手だての示唆を得ることができる。市の算数研究部の先生方ともどもにできあがった冊子「算数科－目標分類・評価基準表」を見るに，先生方の熱意に感銘を受けた。今年の夏休み社会科の１つの小単元において，評価目標と評価基準を作成する機会を得たが，実に大変な作業であった。この作業を，第１学年から第６学年まで全単元にわたって作成したことは，すばらしいエネルギーであり，力量であると考えさせられた。

しかし，三ツ沢小の先生方は，これだけにとどまらず，作成の過程の中で座席表に記入された子供の実態を見るに，おくれている子をこのまま見過ごしていいのだろうか，どうにかして下位の子供を引き上げ，進んでいる子も一緒に育てていく方法はないだろうかという切実な願いがわいて来たという。数学に堪能な学校長の「みんなでかかわりあって共に学ぶ。進んだ子もおくれている子も互いに影響しあうように。」という考えもあわさり，テーマ「みんなが答えを出せる算数の授業」が５９年度に設定されたのである。

みんなが答えを出せる算数の授業の展開。そのためには，教師の深い教材研究が必要なことはいうまでもない。ねらいを十分吟味し，各学年との系統性をつかみながら，どの子も何らかの方法で解決できるような課題を設定することからまず始まる。そして，子供達が自力解決できるよう給食用のつかい古しのわりばしを利用させたり，絵や図など具体物，半具体物の操作を通して自由に解決させる。その際教師は，できない子への援助の手をのばしてやりながら十分時間をかけてとり組ませるのである。そしてそれぞれの解決法について，おくれている子の考えを中心に発表させ，進んでいる子には，その発表から自分の考えとてらしあわさせ共通していることを考えさせるという「共に育てる場面」を設けてねり上げていく。このような学習過程をとりながら，座席表を常に活用し児童のつまずきをチェックし，次時へとつなげていくという連続評価を大切にしているのである。

(2) 三ツ沢小の教師に学ぶ

子供達が栽培したさつまいもをつかった学校手作りのお菓子を出して下さった女事務員さんのあたたかい気持ちを感じながら，研究主任の説明をうけた。説明を聞きながら随所に三ツ沢小の先生方の姿が浮かんできた。

「時間はかかるが，回り道をしている子もいるが，だれもがエジソン。未来に向って可能性をどの子ももっている。」

と常に話されているという校長生先を先頭に，全職員が一人ひとりの子供をいかに大切にしているかということがはだを通して伝わってくる。三ツ沢小の研究は，教育の本質そのものであるように感じる。子供のために夏休み中２１日間も推進会議を開くことに少しもおっくうがらず，しかも朝９時から夜１０時まで没頭したという。数多くの研究授業をものともせず，毎回講師をよび，遠慮のない厳しい話し合い，手きびしい指導をうけることも聞かされた。落ちこぼれは教師が作るといういましめのもとに，今後は，算数の勉強はこうやればよ

いという学び方を学ぶ方向へ力を入れ，算数以外の教科にまで広げていきたいと静かにおだやかな口調で話される研究主任の言葉の裏に，教師としての専門性を高め，人間性をより深めようという情熱を感じさせられた次第である。

3. おわりに

1泊2日という短い期間でありながら，この上なく貴重な体験をした。

この体験研修を通して学んだことを，教育にたずさわる者として，これからの教育に生かすことこそ私たちにこの機会をあたえて下さった皆様への責務であることと強く心に刻む次第であります。